

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 4 月 25 日現在

機関番号：34316

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23065

研究課題名（和文）日本古典文学の国際的な展開 欧米における『方丈記』の受容について

研究課題名（英文）Global circulation of Japanese classical literature: Tracing Hojoki's Western reception

研究代表者

Pradhan Gouranga (Pradhan, Gouranga Charan)

龍谷大学・公私立大学の部局等・博士研究員

研究者番号：40847224

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀末期・20世紀初頭に古典名作『方丈記』の海外受容の一部を明確にし、この作品がいかんして海外で読まれていたのか、そして海外の読者の捉え方は日本における『方丈記』の捉え方といかなる理由でどのように異なっていたのかを明らかにしたものである。また、『方丈記』の海外流通において、夏目漱石や南方熊楠といった近代日本を代表する知識人らがどのように関わったのか、国内外の資料を追跡しながら、その詳細を明らかにした。本研究期間に実施した研究で得られた成果の一部は、単著『世界文学としての方丈記』（法蔵館、2021年刊）として刊行されたと同時に、国内外の学会や学術誌にも発表されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本では従来から愛読された古典名作『方丈記』は、早くから海外でも読まれていたことを明確にしつつ、日本の古典文学の国際的な流通の在り方についても考察を行った。海外における『方丈記』の受容は、日本のそれと異なる場合もあり、そうした新しい解釈の背景に言語・文化・権力関係などの要因があったことを確認できた。こうした研究成果は、日本の古典文学のみならず、日本の近現代文学や国際日本研究の分野における議論の展開にも役に立つと言える。なお、文学作品の国際的な流通は、グローバル化された時代における文化の流通とその捉え方を理解する上でも重要である。

研究成果の概要（英文）：This project studied a part of the overseas reception history of the Japanese medieval classic "Hojoki" (1212) with a particular focus on the late 19th and early 20th centuries and investigated how the understanding of overseas readers differed radically from the Japanese traditional readership. It also investigated the way leading modern Japanese intellectuals like Natsume Soseki and Minakata Kumagusu were not only involved but shaped the trajectory of the work's foreign transmission and reception patterns. Part of the research findings of this study has been published as a Japanese monograph titled "Sekai Bungaku Toshite no Hojoki (Repositioning Hojoki as a World Literature)" (Kyoto: Hozokan, 2021), and other findings were presented at academic forums and published in national/international academic journals.

研究分野：日本文学、比較文学、日本研究

キーワード：方丈記 古典文学の国際受容 鴨長明 世界文学 翻訳論 夏目漱石 南方熊楠

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は、日本古典文学の国際的な展開を広い研究課題とし、この試みの第一歩として博士論文では古典名作『方丈記』の19世紀末期から20世紀初頭までに英語圏でいかに受容されたのかについて研究を行った。博士論文では、この作品の海外伝播において夏目漱石や南方熊楠など近代日本を代表する知識人が果たした役割に焦点を当て、彼らが『方丈記』の海外受容とどのようにに関わり、この作品の解釈の形成にどのように影響を及ぼしたのかを明らかにした。このような研究に着目した背景に次のような背景がある。

日本の古典文学の国内における受容について数多くの研究はあるが、その海外展開に関しては、国内外を含めいくつかの名作を除けばあまり研究は存在しないのが事実である。近年、『源氏物語』『枕草子』などいわゆる古典名作を中心に、その国内外の受容の諸相を明らかにしようとした研究が増えてきたが、こうした名作以外についての研究は明らかに少ない。『方丈記』について言えば、日本では100年以上にわたってたくさんの研究がなされてきたものの、そのほとんどはこの作品を「国文学」という枠組みに捉えており、明治中期という早い時期に海外で読まれた日本の「世界文学」作品として注目されてこなかった。

上記のような状況を受け、本研究では、博士論文では調査することができなかった地域・言語をも対象に、『方丈記』の海外展開について研究することを目指した。英語やフランス語など海外の文献に散見する『方丈記』への言及やその翻訳を考察し、主に欧米におけるこの作品の流通の在り方を明らかにすることを目標とした。このような研究を通じて、これまでに「国文学」の狭い枠組みの中でしか論じられてこなかった『方丈記』を「世界文学」として位置づけなおそうとしたのである。

## 2. 研究の目的

上記背景を踏まえ、本研究期間中に具体的に以下4項目を軸に研究目的を設定した。なお、研究対象期間は『方丈記』が西洋の文献に初めて現れた1870年代から日本の文学作品は海外の読者から注目され始めた1930年代までとした。

夏目漱石、J.M.ディクソン、G.W.アストン、南方熊楠・ディキンズによる『方丈記』訳の他に、上記期間内に行われた西洋諸言語への『方丈記』の翻訳やこの作品への言及に関する情報を収集し、外国人のみならず、日本人による『方丈記』の外国語訳(全訳・部分訳を含む)についても、網羅的に情報収集を行う。

上記で収集した情報・資料の内容分析を行い、それぞれの訳者・著者がこの作品をどのように捉えたのかを明確にする。それと同時に、外国人による日本古典文学への関心の諸相を解明すると同時に、当時の日本知識人らが日本の古典文学を海外にいかにして投影しようとしたのかも明らかにする。

『方丈記』の国際的な流通と受容を事例に、従来の翻訳論・世界文学論を再考し、新たな文学理論の構築を試み、そうすることで日本研究の展開も目指す。

最後に、本研究で得られた研究成果と、申請者がこれまでに行ってきた『方丈記』の国内外の受容に関する研究成果を単著としてまとめて刊行する。なお、これらの研究成果を国内外の学会および学術誌などで研究発表も目指す。

## 3. 研究の方法

本研究は、上記「研究の目的」に提示した ~ の項目を軸として以下のような研究方法をもつ

て研究を展開した。

(1) 国内のみならず海外の研究資料も分析対象とし、日本古典文学の海外受容という広い視野で『方丈記』の受容の研究を行う。

(2) 文学の分野に関係する資料のみならず、学術誌、文芸誌・新聞データベース、宗教、民俗学など文学以外の分野の資料も参照し、分野横断的な手法で分析を行う。こうした研究手法は、学問分野が未だ細分化されていない19世紀末・20世紀初頭の資料分析に有益であるからと思われるからである。

(3) 分析方法に関しては、従来の読者・作者論に加えて、とりわけ翻訳論、世界文学論など比較文学の方法論を採用し、時代背景も考慮することで、テキスト分析だけでは見えない様相を浮き彫りにさせる。

(4) 日本の古典文学の海外流通の経験から、翻訳論および世界文学論を再考し、文学理論の展開に貢献する。

(5) 上記の分析を通して、日本古典文学の国際的な展開の始まりの一側面を明確にし、それが後の日本文学の海外受容などに与えた影響について、研究成果の発表と刊行を行う。

#### 4. 研究成果

本研究期間（令和元年度～令和3年度）における研究成果は、以下の通りである。

(1) 土屋信民（1873～1933）による『方丈記』の部分的なフランス語訳（1898）、市川代治（1872～?）のドイツ語訳（1902）、ルヴォン（Michel Revon, 1867-1947）のフランス語訳（1910）、A.L. Sadler の英訳（1928年）を分析し、それぞれの『方丈記』理解について考察を行った。（研究目的）

考察の結果、これらの翻訳は、夏目漱石とディクソンの『方丈記』理解を継承したアメリカとイギリスの解釈を異なっていたことが確認できた。とりわけ、夏目漱石とディクソンは『方丈記』を西洋のロマン主義的な自然文学作品として解釈しているのに対し、これらの翻訳では、仏教的な文学や閑居文学という『方丈記』の従来の捉え方と近い形で捉えたいことを明確にした。（研究目的）

(2) ルヴォンやサドラーは何れも、夏目漱石に英訳を依頼したディクソンと同じように、オリエンタリズム的な影響を受けて、日本の古典文学の研究を通して、純粋な日本人像を解き明かそうとしたのに対し、土屋信民や市川代治のように、明治期の日本の知識人は、古典文学の外国語訳を通して、西洋に対して日本の文化的な優位性を投企しようとした。（研究目的）

(3) 本研究では、本来の計画していなかったイギリスのモダニスト文学者バジル・バンティングによる『方丈記』のアダプテーション作品についても考察を行い、日本では従来から『方丈記』の自然災害に注目されたのに対し、バンティングはこの作品の人災に着目したことを明確にした。彼の理解の背景に、20世紀初頭の西洋の社会・経済的な状況およびエズラ・パウンドなどモダニスト文学者の影響があったことを実証できた。（研究目的）

(4) 本研究で得た成果は、研究期間中に複数回にわたって、日本比較文学会、日本説話文学会、アジア学会（AAS）、ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）、インド日本研究学会など国内外の学会で積極的に発表を行った。（研究目的）

(5) 本研究成果の一部は、計画通りに『世界文学としての方丈記』（法蔵館、2021年刊）という単著として刊行した。また、本研究期間中に『方丈記』受容の諸相について論じた、日本語及び英語で複数の研究論文も発表した。（研究目的）

(6) 理論に関しては、様々な分野で大活躍している国内外の研究者とともに、編集者・寄稿

者の一人として『ポストコロニアル研究の遺産：翻訳不可能なものを翻訳する』（磯前順一，タラル・アサド，プラダン・ゴウランガ・チャラン，酒井直樹編、人文書院、2022年刊）という学術書の刊行に深く関わり、『方丈記』の国際的な展開の事例から、翻訳論について考察を行った。（研究目的）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 ブラダン・ゴウランガ・チャラン	4. 巻 -
2. 論文標題 「日本酒vsワイン 夏目 漱石の「文化的翻訳（不）可能性」概念をめぐって」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『ポストコロナル研究の遺産 翻訳不可能なものを翻訳する』	6. 最初と最後の頁 185-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Isomae Jun'ichi, Pradhan Gouranga Charan	4. 巻 47
2. 論文標題 Secularism and Untranslatability: Reading Talal Asad's *Secular Translations*	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Religious Studies Review	6. 最初と最後の頁 165 ~ 175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/rsr.15198	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 ブラダン ゴウランガ・チャラン , 磯前 順一	4. 巻 23
2. 論文標題 書評論文 世俗主義批判としての翻訳不能論 : タラル・アサド『世俗の翻訳』(2018)を読む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アリーナ = Arena	6. 最初と最後の頁 771-784
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 6件/うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Pradhan Gouranga Charan
2. 発表標題 Meiji Japan and Cultural (un)Translatability: A Postcolonial Reading of Natsume Soseki's Translation Theory
3. 学会等名 Association of Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年 ~ 2023年

1. 発表者名 ブラダン・ゴウランガ・チャラン
2. 発表標題 『世界文学としての方丈記（日文研叢書）』（法蔵館、2022年）を読む
3. 学会等名 国際日本文化研究センター共同研究室会
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 Pradhan Gouranga Charan
2. 発表標題 Reading Hojoki as a Western Romantic Work of Nature
3. 学会等名 Japan Studies India (JSI) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 ゴウランガ・C・ブラダン
2. 発表標題 夏目漱石の「翻訳論」「翻訳不可能性」論の視点から
3. 学会等名 2021 東アジア日本研究者協議会 第5回国際学術大会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ゴウランガ・チャラン・ブラダン
2. 発表標題 世界文学としての『方丈記』 20世紀初頭までの欧米における鴨長明像
3. 学会等名 国際日本文化研究センター共同研究会「ソリッドな 無常 / フラジャイルな 無常 古典の変相と未来観」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ゴウランガ・チャラン・プラダン
2. 発表標題 夏目漱石英訳『方丈記』について
3. 学会等名 北京日本学研究中心（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Gouranga Charan Pradhan
2. 発表標題 Global circulation of Japanese literature: Reading Hojoki as world literature
3. 学会等名 デリー大学、東アジア研究科（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Gouranga Charan Pradhan
2. 発表標題 Translation and Binarism-Rethinking from the perspective of Japanese literature's global circulation
3. 学会等名 Center for Translation Studies, SOAS University of London（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Gouranga Charan Pradhan
2. 発表標題 Can translation help to overcome the universal-particular dichotomy? Rethinking from the Japanese literature's global circulation
3. 学会等名 AAS in Asia, Kobe, 2020（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Gouranga Charan Pradhan
2. 発表標題 Translation and Binarism-Rethinking from the perspective of Japanese literature 's global circulation
3. 学会等名 Center for Translation Studies, SOAS University of London (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Gouranga Charan Pradhan
2. 発表標題 Global circulation of Japanese literature: Reading Hojoki as world literature
3. 学会等名 デリー大学、東アジア研究科 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Pradhan Gouranga Charan
2. 発表標題 Making an elegy of a prose; Basil Bunting 's Chomei at Toyama and transnational circulation of Japanese literature in early 20th century.
3. 学会等名 EAJS Japan Conference, Tsukuba University, Tsukuba, Japan. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ゴウランガ・チャラン・プラダン
2. 発表標題 散文から詩体へ バジル・バンティング作 “Chomei at Toyama” と世界文学として『方丈記』について
3. 学会等名 東アジア日本研究者協議会・第4回国際学術大会, 国立台湾大学 (台北) 台湾 (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 Pradhan Gouranga Charan
2. 発表標題 Finishing the Unfinished Chomei: Basil Bunting's Chomei at Toyama and Modernists fraud of Japanese literature
3. 学会等名 Nichibunken International Symposium, Cornel Club, 6E, 44th Street, New York City. (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 ブラダン・ゴウランガ・チャラン	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 360
3. 書名 世界文学としての方丈記	

1. 著者名 荒木 浩, ゴウランガ チャラン ブラダン	4. 発行年 2020年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 872
3. 書名 古典の未来学	

1. 著者名 磯前 順一、タラル・アサド、酒井 直樹、ブラダン・ゴウランガ・チャラン	4. 発行年 2022年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 350
3. 書名 ポストコロナル研究の遺産	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------